

## 幼児の感情制御の発達不全評価尺度の作成 (2)

—— 妥当性と信頼性の検証 ——

大河原 美以\*・鈴木 廣子\*\*・猪飼 さやか\*\*\*・響 江吏子\*\*\*\*

臨床心理学分野

(2014年9月30日受理)

### 1. 本論の目的

筆者は、これまでの臨床経験を通して、きれる子どもやおちつきのない子どもの増加、いじめをする子どもの問題、一部の不登校や心身症や学級崩壊などの問題の根底には、感情制御の発達不全の問題があることを指摘し<sup>2) 3) 9)</sup>、感情制御の発達不全の症状形成の仮説モデルを提示してきた<sup>4) 5) 6) 7)</sup>。

感情制御の発達不全<sup>4) 5)</sup>とは、ネガティブ感情を自己に統合することができないために感情制御が困難になっている状態であり、その機制として「解離」が頻繁に使用されるところにその特徴をもつ発達様式である。怒り、悲しみ、不安、恐怖などのネガティブ感情を解離させることで適応する発達のプロセスは、一時的に大人の期待に応える適応を実現するものの、いずれかの時点でネガティブ感情制御に困難をきたし、さまざまな問題行動や症状を呈することになる。ネガティブ感情制御の困難は、暴力や攻撃性の暴走(きれる子)だけでなく、不安の身体化としての心身症、不安や怒りを処理する方法としての強迫症状や抜毛などの症状、自殺企図や自傷行為を生じさせる。ネガティブ感情を自己に統合することができない姿は、過剰適応的な「よい子」の自分と、ネガティブ感情制御困難な「悪い子」の自分との解離を特徴とする自己を構成し、場面によって(学校と家庭、対大人と対同級生、現実世界とサイバースペースなど)モードの違う行動様式を示す。そしてそれが「適応」を保障する在り方として意味をなしているところに、いまどきの子ども

たちの特徴がある<sup>4) 5) 9)</sup>。

感情制御の発達不全にある幼児期の子どもの姿は、多動で攻撃的な過覚醒反応による感情制御困難な姿と、解離に成功して年齢不相応に感情制御できる姿(よい子の解離様式による適応)とに2分される。これらは、どちらか一方の行動様式のみが長期的に主体となる場合と、場面によって異なる2つの行動様式を示している場合とがある。そして過覚醒反応(不機嫌・かんしゃく・文句・暴言などのネガティブ感情の表出)による問題行動は叱責の対象となり、解離反応による適応状態はほめの対象となることにより、2面性モードは強化、増幅されていく<sup>4) 5)</sup>。

以上の感情制御の発達不全に関する臨床仮説の妥当性を、実証的に検証するため、筆者らは、仮説にもとづいた幼児の感情制御の発達不全を評価する尺度の作成を開始した<sup>8)</sup>。

まず、2歳児の感情制御の実態把握を目的として保育士(151名)を対象に予備調査を行った<sup>8)</sup>。ここでは「2歳児の『気になる』『なんかおかしい』『理解できない』行動」について、「どんな場面でどんなふう」に『気になる』のかについて自由記述を求めた。その回答の中から、2歳児の感情表出として正常発達を逸脱していると思われる記述(120例)を抽出し、その特徴を感情制御の発達に関する理論的背景をふまえて、質的に分析した。その結果、過覚醒反応と解離反応の両面を示している姿、解離反応が顕著な姿、過覚醒反応が顕著な姿、反応性愛着障害の典型症状、発達障害の症状の疑いを示した記述に分類された。これら

\* 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

\*\* すすきひろこ心理療法研究室 (020-0024 岩手県盛岡市菜園 2-7-30 スガトウビル 4階)

\*\*\* 東京学芸大学大学院教育学研究科

\*\*\*\* 千葉県船橋市家庭児童相談室 (273-8501 千葉県船橋市湊町 2-10-25)

表1 感情制御の発達不全評価尺度と保育士における内容妥当性調査結果

		「問題かどうか判断できない」 回答数	「問題かどうか判断できない」 割合(%)	体験頻度「体験したことがない」 割合(%)
1	いじわるをする	18	12.16	0.68
2	注意されたり、叱られたりしたときに、にらむことがある	18	12.16	4.11
3	常に感情が不安定で起伏が激しい	3	2.03	4.79
4	思いどおりにならないと、叩いたりかみついたりする	9	6.08	0.68
5	無表情でぼーっとしていることがたびたびある	9	6.08	10.27
6	思いどおりにならないと、「死ぬ」「ぶっ殺す」などの暴言をまく	4	2.70	44.52
7	突然スイッチがはいたように、奇声をあげる	4	2.70	13.70
8	保育園や親の見ていないところでは、自分の思いどおりにならないと、激しい暴力がでる。親の前ではそのようなことはない	1	0.68	12.33
9	けんかをしたときに、怒っている友達の感情を理解できない様子がある	18	12.16	1.37
10	走りまわるなど多動になる	9	6.08	2.05
11	動物などになりきることで、現実逃避しているような姿がみられる	30	20.27	28.77
12	日常的に「死ぬ」「ぶっ殺す」などの暴言をまく	5	3.38	43.15
13	注意されたり、叱られたりしたときに、無表情になる	14	9.46	8.90
14	スキンシップをいやがる	7	4.73	15.75
15	「自分の物」と思っているものにさわられたり、とられそうになると攻撃的になる	13	8.78	0.68
16	保育園や親の見ていないところでは、おちついているが、親の前では豹変して暴力的になる	4	2.70	13.01
17	攻撃的な遊びが、過剰にエスカレートすることがある	6	4.05	5.48
18	実習生やはじめて会う大人に対して、初対面のためらいなく、必要以上にスキンシップを求める	15	10.14	3.42
19	性器いじりがみられる	13	8.78	8.90
20	注意されたり、叱られたりしたときに、目が泳いで目を合わせることができない	10	6.76	2.74
21	遊具をばらまき、遊びが成立しない	8	5.41	1.37
22	保育園や親の見ていないところでは、おちついているが、親の前ではやってはいけないことをする	11	7.43	3.42
23	けんかやめごととは、まったく関係のない子をたたいたり、かじったりする	7	4.73	5.48
24	「いじめられた」などの被害を訴えることで、親の関心をひこうとすることがある	10	6.76	17.12
25	あそびを楽しむことができず、不安が非常につよい	2	1.35	15.75
26	おちつきのない時間帯に、興奮状態がなかなかおさまらない	14	9.46	3.42
27	親の期待に応えようとして、本心ではない行動をしているようにみえる	11	7.43	10.96
28	泣き始めると泣き止むタイミングをみつけれられない	18	12.16	0.68
29	親に甘えようとししない	2	1.35	24.66
30	眠くなると、乳児のように泣いて訴える	14	9.46	10.96
31	思いどおりにならないと、とびだしていく	8	5.41	15.75
32	おひるねなどの静かな時間帯になると、なかなか興奮状態がおさまらない	11	7.43	9.59
33	他人の大人に抱きつき、甘えがエスカレートして止まらなくなる	7	4.73	5.48
34	保育園や親の見ていないところでは、「ダメ」など注意をうける場面で、怒りだしパニックになる。親の前ではそのようなことはない	4	2.70	10.27
35	思いどおりにならないと、おしゃぶりを求める	13	8.78	28.08
36	保育園や親の見ていないところでは、保育士などに甘えて激しく泣く。親の前ではそのようなことはない	3	2.03	10.27
37	思いどおりにならないと、泣き叫んでパニック状態になる	5	3.38	2.74
38	何事にも意欲がない	4	2.70	17.81
39	泣いて訴えるべき場面で、すぐにあきらめてけろっとする	17	11.49	4.79
40	けんかやめごとがあったとき、たたいたりかじったりした理由を、相手のせいにする	12	8.11	2.74
41	保育園や親の見ていないところでは、大人の指示に従おうとししない。親のいうことはよくきく	4	2.70	7.53
42	激しく泣いてパニックになっていたかと思うと、急にけろっとして、また同じことをするなど、気分に変遷がないことがある	10	6.76	5.48
43	保育園や親の見ていないところでは、自分の思いどおりにならないと、年齢相応にがまんすることができない。親の前ではそのようなことはない	4	2.70	8.90
44	思いどおりにならないと、自傷行為をする	3	2.03	34.25
45	親の前で無表情になる	9	6.08	36.30

をまとめ、母がわが子の様子を見て応えることができる質問項目の形に文言を整え、幼児の感情制御の発達不全評価尺度の尺度項目(45項目)を選定した<sup>8)</sup>(表1)。

本論の目的は、筆者らのこの質的研究<sup>8)</sup>により作成

した尺度項目の妥当性と信頼性を、量的データにより検証し、幼児の感情制御の発達不全評価尺度を作成することである。

そのために、まず尺度項目の内容妥当性を確認する。幼児の保育の専門家である保育士と、心理につい

での専門家である臨床心理士を対象に行う。次に、統計処理による因子妥当性と信頼性の検証を行うために、3歳児健診時の母を対象にした調査を実施し、統計分析により妥当性と信頼性を検証する。

## 2. 内容妥当性の検証

### 2.1 方法

〈保育士への調査〉

尺度項目の「問題の程度」と「体験頻度」の点から内容妥当性を検証するために、日ごろ幼児の保育を専門としている保育士に調査を実施した。

実施時期：平成22年11月～12月

調査方法：3つの自治体の保育園100か所に3枚ずつ郵送し、回答を求めた（計300枚）。

調査内容：感情制御の発達不全評価尺度の各項目（表1）が、「2歳児の感情の発達として、どの程度問題だと思うか」を4件法（非常に問題だと思う・問題だと思う・問題かどうかは微妙だ・判断できない）でたずねた。また、各項目について「2歳児と関わる中でどの程度体験するのか」を4件法（よく体験する・時々体験する・あまり体験したことがない・体験したことがない）でたずねた。

調査協力者：160名（回収箇所54か所・回収率53.33%）うち、有効回答数146名。

〈臨床心理士への調査〉

尺度項目の概念との一致度の点から内容妥当性を検証するために、幼児の防衛反応（解離反応・過覚醒反応）に詳しい臨床心理士に調査を実施した。

実施時期：平成22年12月

調査方法：質問紙の送付および回答をEメールにより行った。

調査内容：感情制御の発達不全評価尺度（表1）の各項目が、想定された尺度項目群（解離反応と過覚醒反応、反応性愛着障害）の分類にあてはまるかを4件法（非常にそう思う・そう思う・少しそう思う・判断できない）でたずねた。すなわち、概念一致度として「解離反応と過覚醒反応が生じることで、行動や感情状態に一貫性がない状態像」「自分の感情にとどまっていることができない状態（解離反応）」「興奮状態で感情制御ができない状態（過覚醒反応）」「親との安定した愛着関係をもつことができていない状態（反応性愛着障害）」にどの程度あてはまるかをたずねた。

調査協力者：臨床心理士8名

### 2.2 結果

〈保育士への調査〉

項目ごとに、保育士が「問題かどうか判断できない」を選択した回答数と割合を表1に示した。「判断できない」を選択した割合が最も高いものは、項目11「動物などになりきることで、現実逃避しているような姿がみられる」の20.27%であった。それ以外については、すべてそれより低い割合を示していた。

また、体験頻度（表1）において「体験したことがない」を選択した割合が最も高いものは、項目12「日常的に『死ぬ』『ぶっ殺す』などの暴言をはく。」の43.15%、項目6「思い通りにならないと、『死ぬ』『ぶっ殺す』などの暴言をはく。」の44.52%であった。しかし逆に言うと、半数以上の保育士が、2歳児のこれらの行動を体験しているということでもあった。

〈臨床心理士への調査〉

1名が、項目1・2・6・11・21・32・40において、「判断できない」と回答したが、7名が妥当であると判断していた。

## 3. 因子妥当性と信頼性の検証

### 3.1 方法

A市内の3歳児健診に訪れた母親315名を対象に質問紙調査を実施した。調査は平成25年4月～平成26年3月に行なわれ、有効回答数は、303名であった。各項目に対して、「5：非常によくあてはまる」「4：よくあてはまる」「3：どちらかといえばあてはまる」「2：ほとんどあてはまらない」「1：全くあてはまらない」の5件法で回答を求めた。

### 3.2 結果

#### 3.2.1 基礎統計量と項目ごとの分布

感情制御の発達不全評価尺度の平均値と標準偏差および天井効果とフロア効果の値を、表2に示した。また表2には、各項目において「あてはまる」と回答した人（「5：非常によくあてはまる」「4：よくあてはまる」「3：どちらかといえばあてはまる」）の割合も記載した。

#### 3.2.2 因子構造の確認および項目精選

探索的に因子分析を行った結果（主因子法・Promax回転）、3因子構造が妥当であると考えられたため、3因子構造を仮定して因子分析を繰り返した。その結果、因子負荷量が.35以下または共通性.16以下となった、項目5・9・11・13・14・18・19・22・

表2. 感情制御の発達不全評価尺度の基礎統計量

	平均値	標準偏差	天井効果	フロア効果	「あてはまる (3～5)」と回答した人の割合
Q1: いじわるをする	2.32	.838	3.16	1.48	33.99%
Q2: 注意されたり、叱られたりしたときに、にらむことがある	2.36	.982	3.34	1.37	38.61%
Q3: 常に感情が不安定で起伏が激しい	2.02	.803	2.83	1.22	23.10%
Q4: 思いどおりにならないと、叩いたりかみついたりする	2.19	.962	3.16	1.23	33.99%
Q5: 無表情でぼーっとしていることがたびたびある	1.43	.696	2.13	0.74	5.94%
Q6: 思いどおりにならないと、「死ね」「ぶっ殺す」などの暴言をはく	1.13	.404	1.53	0.72	2.64%
Q7: 突然スイッチがはいたように、奇声をあげる	1.48	.771	2.25	0.71	9.57%
Q8: 保育園や親の見ていないところでは、自分の思いどおりにならないと、激しい暴力がでる。親の前ではそのようなことはない	1.22	.459	1.68	0.76	1.98%
Q9: けんかをしたときに、怒っている友達の感情を理解できない様子がある	1.69	.683	2.37	1.01	9.24%
Q10: 走りまわるなど多動になる	2.09	1.070	3.16	1.02	31.35%
Q11: 動物などになりきることで、現実逃避しているような姿がみられる	1.32	.574	1.89	0.74	4.95%
Q12: 日常的に「死ね」「ぶっ殺す」などの暴言をはく	1.06	.281	1.34	0.78	0.99%
Q13: 注意されたり、叱られたりしたときに、無表情になる	1.39	.657	2.05	0.74	6.93%
Q14: スキンシップをいやがる	1.12	.366	1.49	0.76	1.32%
Q15: 「自分の物」と思っているものにさわられたり、とられそうになると攻撃的になる	2.25	.923	3.18	1.33	35.31%
Q16: 保育園や親の見ていないところでは、おちついているが、親の前では豹変して暴力的になる	1.30	.573	1.87	0.72	3.30%
Q17: 攻撃的な遊びが、過剰にエスカレートすることがある	1.45	.693	2.14	0.76	8.91%
Q18: 実習生やをはじめて会う大人に対して、初対面のためらいなく、必要以上にスキンシップを求める	1.62	.766	2.39	0.85	12.54%
Q19: 性器いじりがみられる	1.67	.875	2.54	0.79	17.16%
Q20: 注意されたり、叱られたりしたときに、目が泳いで目を合わせることができない	1.65	.824	2.47	0.83	14.19%
Q21: 遊具をばらまき、遊びが成立しない	1.45	.648	2.09	0.80	6.60%
Q22: 保育園や親の見ていないところでは、おちついているが、親の前ではやってはいけないことをする	1.58	.709	2.29	0.87	10.23%
Q23: けんかやめごととは、まったく関係のない子をたたいたり、かじったりする	1.17	.424	1.59	0.74	1.98%
Q24: 「いじめられた」などの被害を訴えることで、親の関心をひこうとすることがある	1.59	.829	2.42	0.76	15.84%
Q25: あそびを楽しむことができず、不安が非常につよい	1.26	.503	1.76	0.76	2.97%
Q26: おちつきのない時間帯に、興奮状態がなかなかおさまらない	1.50	.771	2.27	0.72	9.90%
Q27: 親の期待に応えようとして、本心ではない行動をしているようにみえる	1.41	.633	2.04	0.77	6.60%
Q28: 泣き始めると泣き止むタイミングをみつけれられない	1.69	.816	2.50	0.87	13.53%
Q29: 親に甘えようとしない	1.15	.380	1.53	0.77	0.99%
Q30: 眠くなると、乳児のように泣いて訴える	1.59	.792	2.38	0.80	13.20%
Q31: 思いどおりにならないと、とびだしていく	1.39	.696	2.09	0.70	8.25%
Q32: おひるねなどの静かな時間帯になると、なかなか興奮状態がおさまらない	1.45	.633	2.08	0.82	5.94%
Q33: 他人の大人に抱きつき、甘えがエスカレートして止まらなくなる	1.26	.555	1.82	0.71	3.63%
Q34: 保育園や親の見ていないところでは、「ダメ」など注意をうける場面で、怒りだしパニックになる。親の前ではそのようなことはない	1.18	.419	1.60	0.76	1.32%
Q35: 思いどおりにならないと、おしゃぶりを求める	1.25	.692	1.94	0.56	6.60%
Q36: 保育園や親の見ていないところでは、保育士などに甘えて激しく泣く。親の前ではそのようなことはない	1.18	.411	1.59	0.77	0.99%
Q37: 思いどおりにならないと、泣き叫んでパニック状態になる	1.53	.762	2.29	0.77	12.54%
Q38: 何事にも意欲がない	1.17	.430	1.60	0.75	1.32%
Q39: 泣いて訴えるべき場面で、すぐにあきらめてけろっとする	1.41	.601	2.01	0.80	5.28%
Q40: けんかやめごとがあったとき、たたいたりかじったりした理由を、相手のせいにする	1.76	.847	2.61	0.91	20.13%
Q41: 保育園や親の見ていないところでは、大人の指示に従おうとしない。親のいうことはよくきく	1.36	.562	1.92	0.79	3.63%
Q42: 激しく泣いてパニックになっていたかと思うと、急にけろっとして、また同じことをするなど、気分に変遷性がないことがある	1.42	.685	2.10	0.73	6.93%
Q43: 保育園や親の見ていないところでは、自分の思いどおりにならないと、年齢相応にがまんすることができない。親の前ではそのようなことはない	1.35	.567	1.92	0.79	2.64%
Q44: 思いどおりにならないと、自傷行為をする	1.17	.559	1.73	0.61	3.30%
Q45: 親の前で無表情になる	1.14	.377	1.52	0.77	0.99%

24・31・35を削除した。ここで、内容妥当性をより高めることを目的として、2. 内容妥当性の検証の際に、1名の臨床心理士が「判断できない」と回答した項目1・2・6・21・32・40、保育士の10%以上が「判断できない」と回答した項目1・2・28・39、および「体験したことがない」保育士が30%を超えていた項目6・12・44・45を削除した。  
それにより、第3因子と仮定されていた項目数が

減ったため、2因子指定の因子分析を再度行った。その結果、さらに因子負荷量が.35以下となった項目25・33を削除し、最終的に2因子構造を採用した。探索的因子分析結果(20の項目内容・因子負荷量・因子寄与率・因子間相関・因子ごとの $\alpha$ 係数)は表3に示した。

因子名は、第1因子を「過覚醒行動」、第2因子を「解離様式による二面性行動」と命名した。

表3 探索的因子分析結果(主因子法、Promax回転、項目数は20項目、N=303)

因子名	項目番号	項目	因子		共通性
			F1	F2	
過覚醒行動 ( $\alpha = .862$ )	Q10	走りまわるなど多動になる	.777	-.148	.468
	Q3	常に感情が不安定で起伏が激しい	.709	-.138	.388
	Q26	おちつきのない時間帯に、興奮状態がなかなかおさまらない	.702	.043	.536
	Q7	突然スイッチがはいったように、奇声をあげる	.693	.016	.495
	Q20	注意されたり、叱られたりしたときに、目が泳いで目を合わせることができない	.554	-.044	.275
	Q37	思いどおりにならないと、泣き叫んでパニック状態になる	.548	.119	.404
	Q42	激しく泣いてパニックになっていたかと思うと、急にけろっとして、また同じことをするなど、気分に変調がないことがある	.534	.163	.431
	Q17	攻撃的な遊びが、過剰にエスカレートすることがある	.525	.101	.359
	Q27	親の期待に応えようとして、本心ではない行動をしているようにみえる	.465	.193	.377
	Q15	「自分の物」と思っているものにさわられたり、とられそうになると攻撃的になる	.451	.022	.218
Q30	眠くなると、乳児のように泣いて訴える	.437	.129	.284	
解離様式による 二面性行動 ( $\alpha = .859$ )	Q34	保育園や親の見ていないところでは、「ダメ」など注意をうける場面で、怒りだしてパニックになる。親の前ではそのようなことはない	-.126	.866	.616
	Q36	保育園や親の見ていないところでは、保育士などに甘えて激しく泣く。親の前ではそのようなことはない	-.066	.740	.486
	Q43	保育園や親の見ていないところでは、自分の思いどおりにならないと、年齢相応にがまんすることができない。親の前ではそのようなことはないとはならない	.033	.709	.536
	Q8	保育園や親の見ていないところでは、自分の思いどおりにならないと、激しい暴力がでる。親の前ではそのようなことはない	.063	.653	.487
	Q41	保育園や親の見ていないところでは、大人の指示に従おうとしない。親のいうことはよくきく	.149	.621	.535
	Q29	親に甘えようとししない	-.111	.537	.219
	Q23	けんかやめごととは、まったく関係のない子をたたいたり、かじったりする	.081	.522	.337
	Q38	何事にも意欲がない	.155	.413	.282
	Q16	保育園や親の見ていないところでは、おちついているが、親の前では豹変して暴力的になる	.257	.385	.350
	因子寄与			7.54	1.67
因子寄与率 (%)			37.70	8.35	
累積因子寄与率 (%)			37.70	46.06	
因子間相関係数			F1	F2	
F1			1.000		
F2			.683	1.000	

表 4 確認的因子分析結果 (項目数=20項目)

因子名	項目番号	項目	標準化係数	R <sup>2</sup>
過覚醒行動 ( $\alpha=.862$ )	Q10	走りまわるなど多動になる	.655	.429
	Q3	常に感情が不安定で起伏が激しい	.589	.347
	Q26	おちつきのない時間帯に、興奮状態がなかなかおさまらない	.736	.541
	Q7	突然スイッチがはいたように、奇声をあげる	.696	.485
	Q20	注意されたり、叱られたりしたときに、目が泳いで目を合わせることができない	.506	.256
	Q37	思いどおりにならないと、泣き叫んでパニック状態になる	.648	.420
	Q42	激しく泣いてパニックになっていたかと思うと、急にけろっとして、また同じことをするなど、気分に関連性がないことがある	.659	.435
	Q17	攻撃的な遊びが、過剰にエスカレートすることがある	.602	.363
	Q27	親の期待に応えようとして、本心ではない行動をしているようにみえる	.614	.377
	Q15	「自分の物」と思っているものにさわられたり、とられそうになると攻撃的になる	.455	.207
-----	-----	-----	-----	-----
解離様式による 二面性行動 ( $\alpha=.859$ )	Q34	保育園や親の見ていないところでは、「ダメ」など注意をうける場面で、怒りだしパニックになる。親の前ではそのようなことはない	.747	.558
	Q36	保育園や親の見ていないところでは、保育士などに甘えて激しく泣く。親の前ではそのようなことはない	.663	.439
	Q43	保育園や親の見ていないところでは、自分の思いどおりにならないと、年齢相応にがまんすることができない。親の前ではそのようなことはない	.750	.563
	Q8	保育園や親の見ていないところでは、自分の思いどおりにならないと、激しい暴力がでる。親の前ではそのようなことはない	.717	.514
	Q41	保育園や親の見ていないところでは、大人の指示に従おうとしない。親のいうことはよくきく	.753	.567
	Q29	親に甘えようとしらない	.432	.187
	Q23	けんかやめごととは、まったく関係のない子をたたいたり、かじったりする	.580	.337
	Q38	何事にも意欲がない	.525	.276
	Q16	保育園や親の見ていないところでは、おちついているが、親の前では豹変して暴力的になる	.577	.333

$\chi^2=379.17$   
df=169  
GFI=.883  
AGFI=.855  
CFI=.907  
RMSEA=.064

	因子間相関係数	
	過覚醒行動	解離様式による二面性行動
過覚醒行動	—	
解離様式による二面性行動	.746	—

第2因子までの累積寄与率は46.06%であり、Promax回転後の因子間相関係数は高い値を示していた。また、2つの因子のCronbachの $\alpha$ 係数は、第1因子「過覚醒行動」が.862、第2因子「解離様式による二面性行動」が.859であり、十分な信頼性が確認された。

### 3. 2. 3 確認的因子分析による検証

次に、3.2.2で得られた因子構造と項目との対応の適否を明らかにするため、確認的因子分析を行った。その結果を表4に示した。また、分析には、Amos21.0 (SPSS社)を用いた。

分析の結果、GFIが.883、AGFIが.855、CFIが.907、

RMSEAが.064となり、確認的因子分析モデルは検証に耐えうると判断した。標準化係数を比べると、20項目のいずれも有意な係数となり、その値は.432～.753の範囲で、全体的に大きな係数値となっていた。

このことから、感情制御の発達不全評価尺度の因子構造および項目構成について、妥当性と信頼性が担保された。

## 4. 考察

本研究で作成した感情制御の発達不全評価尺度は、2歳児の現状における質的データを出発点として、項

目を精選し、統計的データにより因子妥当性と信頼性を確認したものである。2-3歳児において、このような反応を示している子どもは、この段階で親子関係の改善のためのケアを受けることができれば、その後の小学校・中学校でのさまざまな問題行動や症状を予防することが可能になる。

筆者は、日本全国どこにいても「親の前でよい子／学校・保育園でできる子」の問題で苦労している援助者から相談をうける。幼児期の逸脱した発達様式は、「発達障害」という枠組みでの診断が下されることが多いが、生来的な発達障害の子どもであるならば、「親の前でよい子」という行動をとることは不可能である。にもかかわらず、診断基準が存在しないため、この「場面によるふるまいの違い」は診断に際しては軽視されがちである。

筆者は、このような子どものあり様が、きわめて日本的なものである可能性に目をむけ、感情制御困難を生み出す親子関係の文化差について、これまでに考察を加えてきた<sup>10)</sup>。個人主義 (I-nessの文化) を重んじ、乳幼児と別室で寝る文化をもつ欧米諸国における親子関係の問題と、日本人 (We-nessの文化) が抱える親子関係の問題とは質的な差異があると考えべきだろう。

幼児の過覚醒・解離反応などの感情制御の発達不全状態は、親が子の負情動・身体感覚の表出を否定することから生じるが、響・大河原<sup>1)</sup>の研究からは、次のことが明らかになった。授乳時の愛着システム不全がある母は、子の負情動表出を受け入れることができない傾向をもつが、それとは独立に、母自身が泣くことについて否定的認知を抱えている場合にも、子の負情動表出を受け入れられないということが示された。愛着関係が良好な親子であっても、泣く場面においてのみ拒絶を受けるという関係性にあれば、子は解離反応により親に適応する可能性が高くなる。

今後は、このような文化的特徴を明らかにしていくことも含めて、より早期の母子への支援を可能にするため、6ヶ月健診と3歳児健診における縦断研究を行う予定である。3歳児健診において本研究で作成した感情制御の発達不全評価尺度を用いて、子の感情制御の発達状態をチェックし、6ヶ月健診時の愛着システム不全評価尺度 (本冊子別稿: 鈴木ら<sup>11)</sup>) やその他の要因との関連を検証することで、子育て環境と子どもの感情制御の発達の関係を明らかにする予定である。

付記: 調査にご協力いただいた皆様に、心より感謝申

上げます。また、統計分析のご指導を賜りました東京学芸大学教授岸学先生にお礼申し上げます。本調査の一部は平成22年度東京学芸大学重点研究費によって実施された。

## 引用文献

- 1) 響江吏子・大河原美以: 母親が乳幼児の負情動表出を受け入れられないのはなぜか?—「泣き」に対する認知と授乳をめぐる愛着システム不全の影響—, 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第65集, 97-108, 2014.
- 2) 大河原美以: 怒りをコントロールできない子の理解と援助 教師と親の関わり, 金子書房, 2004.
- 3) 大河原美以: 親子のコミュニケーション不全が子どもの感情の発達に与える影響—「よい子がされる」現象に関する試論—, カウンセリング研究, 37, 180-190, 2004.
- 4) 大河原美以: 子どもの心理治療にEMDRを利用することの意味—感情制御の発達不全と親子のコミュニケーション—, こころの臨床アラカルト, 27 (2), 293-298, 星和書店, 2008.
- 5) 大河原美以: 子どもの「感情制御の発達不全」と治療援助の方法論, 平成21年度東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士学位論文, 2010.
- 6) 大河原美以: 教育臨床の課題と脳科学研究の接点 (1) —「感情制御の発達不全」の治療援助モデルの妥当性—, 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第61集, 121-135, 2010.
- 7) 大河原美以: 教育臨床の課題と脳科学研究の接点 (2) —感情制御の発達と母子の愛着システム不全—, 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第62集, 215-229, 2011.
- 8) 大河原美以・鈴木廣子・藤岡恵・殿川佳子・響江吏子: 幼児の感情制御の発達不全評価尺度の作成 (1) —2歳児における質的データの分析—, 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第62集, 231-240, 2011.
- 9) 大河原美以: 将来心配な「よい子」と過剰適応, 教育と医学, 2012年7月号, 4-10, 慶應大学出版会, 2012.
- 10) 大河原美以・響江吏子: 感情制御困難を生み出す日本特有の親子関係—日米の差異を探索する調査を通して—, 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要, 第9集, 39-50, 2013.
- 11) 鈴木廣子・大河原美以・猪飼さやか・響江吏子: 母子の愛着システム不全評価尺度の作成 (2) —妥当性と信頼性の検証—, 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 第66集, 253-261, 2015.

# 幼児の感情制御の発達不全評価尺度の作成（2）

—— 妥当性と信頼性の検証 ——

## Development of Under-Developed Emotional Regulation Scale for Infants (2):

### Investigation of Factorial Validity and Reliability

大河原 美以<sup>\*</sup>・鈴木 廣子<sup>\*\*</sup>・猪飼 さやか<sup>\*\*\*</sup>・響 江吏子<sup>\*\*\*\*</sup>

Mii OKAWARA, Hiroko SUZUKI, Sayaka IKAI and Eriko HIBIKI

臨床心理学分野

#### Abstract

The purpose of this paper is to develop Under-Developed Emotional Regulation Scale for Infants (UDERSI) and to investigate the factorial validity and reliability. The items of Under-Developed Emotional Regulation Scale for Infants (UDERSI) had been selected by the qualitative investigation. First, the investigations of the content validity were conducted for childcare workers (160) as child-care professionals and clinical psychologists (8) as professionals of child psychology. Next, mothers (303) completed this scale by the baby medical examination for 3 years child, and the factor validity and the reliability of this scale were examined by the statistic processing. After making careful selection by the content validity, it was found that this scale had 2 factors structure by Exploratory Factor Analysis and Confirmatory Factor Analysis. The factors were named the hyper-arousal behavior factor and the bilateral characteristic behavior by primary dissociation factor. These factors corresponded with the theoretical model.

**Keywords:** emotional regulation, hyper arousal, dissociative, reactive attachment disorder, infant

*Department of Clinical Psychology, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 本論の目的は、質的研究により作成した尺度項目の妥当性と信頼性を、量的データにより検証し、幼児の感情制御の発達不全評価尺度を作成することである。そのために、まず、幼児の保育の専門家である保育士（160名）と、心理についての専門家である臨床心理士（8名）を対象にした調査により、尺度項目の内容妥当性の検証を行った。次に、因子妥当性と信頼性の検証を行うために、3歳児健診時の母（303名）を対象にした調査を実施した。内容妥当性を確認して項目を精選したのち、探索的因子分析と確認的因子分析により2因子構造であることを確認した。2因子は、過覚醒行動因子と解離様式による二面性行動因子と命名され、理論的仮説モデルと一致した。

**キーワード:** 感情制御, 過覚醒, 解離, 反応性愛着障害, 幼児

---

\* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

\*\* Suzuki Hiroko Research Laboratory for Psychological Treatment (4F Sugatou-biru, 2-7-30, Saien, Morioka-shi, Iwate, 020-0024, Japan)

\*\*\* Graduate School of Education Tokyo Gakugei University

\*\*\*\* Funabashi Family and Children Affairs Counseling Room (2-10-25 Minato-cho, Funabashi-shi, Chiba, 273-8501, Japan)